

2022年  
1・2月号

# 赤れんが通信

北海道の縄文遺跡群

北海道

www.pref.hokkaido.lg.jp

世界遺産一覧表に記載された「北海道の縄文遺跡群」について北海道庁国際局国際課のステイバードホークス・マクスウェル交流員がご紹介します。

## 1万年を超える旅：北海道の縄文のルーツ

2021年7月27日午後6時30分、北海道・北東北にある17の縄文遺跡群が世界遺産一覧表に正式に記載されたその瞬間、1万年以上の歴史が現在に蘇ってきました。「縄文」の物語は、「北海道」の物語と不可分であるということに変わりありませんが、世界遺産一覧表に記載されたことで、ここ北海道の地で人間と自然が古代から互いに影響しあってきたということがより多くの人に伝わることでしょう。この興味深い時代をより深く知るために、いくつかの遺跡を訪ねてきました。そこで学んだことをご紹介しますと思います。さあ、何千年も前の北海道に行ってみましょう！



まずは、「縄文時代」の定義と「縄文」という言葉の意味を確認しましょう。多くの説がありますが、縄文時代は、起源前13,000年頃から起源前300年頃までの期間だと考えられています。また、この時代の人々（縄文人）は、

狩猟採集を中心とした生活をしていたと考えられています（狩猟採集と言っても遊牧民ではありません）。集落のほとんどは、食糧や天然資源に恵まれた地域の近くに位置しています。



「縄文」という言葉は、この時代に使われていた「縄文土器」に由来しています。「縄文土器」の他に、「縄紋土器」や「索紋土器」などの名称も使われたことがありますが、これらの名称はすべてアメリカの考古学者であるエドワード・S・モースというが1877年に報告した「Cord Marked Pottery」から派生したものです。ところが、縄文時代は土器だけにとどまりません。これから訪問した様々な場所を紹介したいと思います！

All issues of The Red Brick Bulletin can be accessed at [https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/akarenga\\_eng\\_japanese\\_edition.html](https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/akarenga_eng_japanese_edition.html)

Published by the International Affairs Division, Department of Policy Planning and Coordination, Hokkaido Government (Edited by Maxwell Stibbard Hawkes)  
ADDRESS: N3W6 Chuo-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan 060-8688 PHONE: +81(0)11-231-4111 FAX: +81(0)11-231-4303

最初に訪れたのは、千歳市埋蔵文化財センターです。ここでは、近くのキウス周堤墓群で出土した品を鑑賞したり、その地域の興味深い歴史について色々教えていただきました。

現在、キウス周堤墓群の周辺は農地へ転用されていますが、当時は湿地が西に広がり、近くのマオイの丘を含め、食料が豊富にある地域だったようです。

そして、何と言っても、最大の見どころは周堤墓群自体です。一番大きいものは、直径8.3メートルという巨大さです（直径は、ボーイング777より長いです）。深さも想像を超えるほどで、約3,000 m<sup>3</sup>もの土砂を掘り出す必要があったと推定されています。

その大変な肉体労働を想像するだけで食欲が湧いてくる中、次の目的地の道の駅サーモンパーク千歳に向かって出発しました。到着すると、近くの川から数えられないほど大量のサケを捕まえている様子を目撃し、「何千年も前に縄文人を養っていた川が、今でも私たちの生活を支えているのだ」と改めて実感しました。道の駅では、スモークサーモンピザ（せっかくサーモンパークに来たのですからね）を注文し、モリモリと食べました。心もお腹もサケで満たされ、次の遺跡群へ向かいました。

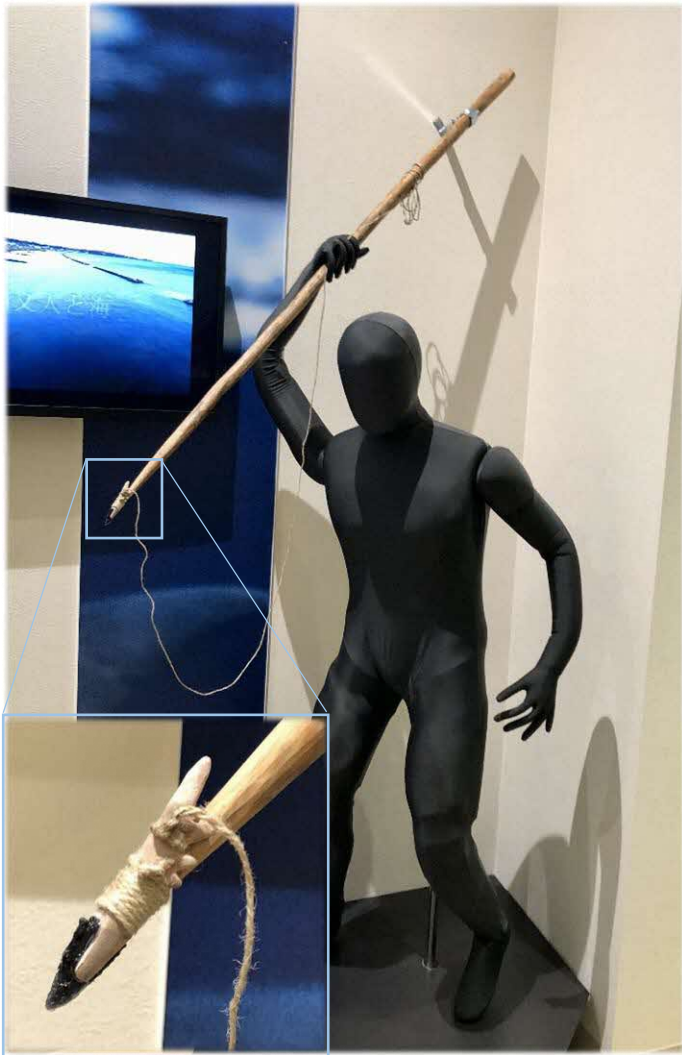


次の伊達市の北黄金貝塚でも、魚介類のテーマが続きます。無数の魚介類の廃棄物が堆積し、巨大な「貝塚」となっています。アサリ、ホタテ、カキなどの貝のほか、クジラ、オットセイなどといった大型の海洋哺乳類や様々な魚の骨もありました。貝塚を見学した後、こういった場所に、人間が埋葬されたということを知って、「巨大なゴミ捨て場に過ぎないだろう」という思い込みが覆されました。北黄金貝塚で行われた儀式の形跡から、ここは、物が「捨てられた場所」というよりも、「大地に返された場所」という役割を果たしたようです。更に、埋める前に、使い古した道具が儀式的に壊された形跡もありました。縄文人の精神性についてはまだ不明な点が多いのですが、自然のサイクルと共に生活することを通して、「死」と「再生」は切り離せないものだと考えられていたようです。ですから、地球からいただいた物はいつか地球に返さなければいけないのです。



旬の食材を食べるということは、縄文生活の中核をなすものです。そこからインスピレーションを受けて、近くの「だて歴史の杜」という道の駅で、地元産の採れたての野菜をたくさん買いました。やはり、「食材をかごに入れ、レジまで運んで購入する」というのは、あまり狩猟採集らしくないかもしれませんが、縄文時代の忠実な再現性に欠けている代わりに便利さがありました。ただし、陳列台に、よく見かける野菜に加え、真っ赤なルバーブを見つけて、とても嬉しくなりました。ルバーブは日本ではめったに見かけない野菜なので、食べる機会がほとんどありません。その日ホテルに戻った後、一人でささやかなルバーブ・パーティーをしました。ルバーブは大好きなのです。宿泊したホテルは洞爺湖のほとりにあり、夜になると、湖上に大輪の花火が打ち上がり、色とりどりに染まる空が湖面に映っていました。その色鮮やかな光景を眺めながら、縄文時代の活気や多様性に想いを馳せていました。今夜は少し疲れを感じましたが、満たされた気持ちで眠りにつきました。

2日目の朝、「そうべつ情報館 i」という道の駅に向かってホテルを出発しました。壮瞥町は果物で有名で、道の駅では絞りたてのりんごジュースの1リットル瓶を買い、入江・高砂貝塚に行く道中、ごくごく飲みました。



こちらの遺跡群では、縄文人の食文化や狩猟習慣について色々学びました。ここではエゾシカの角で作られた銚や黒曜石で作られた刃を見ることができました。貝塚の堆積物を分析すると、時代が進むにつれ手に入る食材も変化していて、それによって当時の気候も大きく変化したことがわかりました。巨大な貝塚の下層部にはカキやウニの殻が多く、上層部で最も多かったのはアサリの貝だそうです。

また、人の地域間の移動を示す証拠として、本州から北海道へ嫁ぎに来たのではと考えられる女性の頭蓋骨も発見されました。本州の人だと推測される理由は、虫歯がたくさんあるからです。地域によって縄文人の食文化が違って、本州の人は糖質の多い木の実などを中心に生活していたので、虫歯が多いようです。一方、北海道の人は糖質の少ない肉や魚介類を中心に暮らしていたので、虫歯がほとんどないそうです。それに加えて、同じ場所でイノシシの骨で作られた飾りも出土されました。当時はイノシシが北海道にはいなかったことがわかっているため、当時本州と貿易が行われたことは確かです。



興味深いことに、入江・高砂貝塚ではマグロ、サメ、オットセイ、イルカ、エゾシカなどの骨の他に44の人骨も発掘されました。これによって、貝塚というものは、ただの捨て場ではなく、霊地のような存在だったことがわかっています。また、ここで小児麻痺にかかったと思われる手足の骨が未発達な成人男性の人骨も出土されており、当時、人々がお互いを助け合いながら暮らしていた可能性を示唆します。

最後に訪れた遺跡群は、入江貝塚から約150kmも離れたので、車でも移動に時間がかかりました。ようやく到着したのは、函館市縄文文化交流センターで、北海道初の国宝中空土偶（1ページ目に写っている「茅空」）を始め、近くの垣ノ島遺跡や大船遺跡などの出土品を展示する近代的な施設です。こちらは、おそらく今回の旅で最も印象的な施設でした。

垣ノ島・大船遺跡自体も大変興味深かったです。ここでは、縄文人の生活習慣の一端を伺い知ることができました。大船遺跡では縄文の竪穴住居や盛り土遺構が復元されていて、当時の集落の様子をイメージしやすい場所です。竪穴住居の最も特徴的な点は、穴の深さだと思います。生活エリアは地面よりかなり低く、急な傾斜の土壁に囲まれていました。大船遺跡の竪穴住居のなかで一番深い場所は約2.4mで、竪穴住居の深さと仕組みは、気候とともに変化していったと考えられています。紀元前3,500年～紀元前2,000年の間、大船遺跡に人が住んでいた期間に気候が大きく変化したとされています。



縄文文化交流センターは、遺物や情報の宝庫で、今回の旅で学んだことを再確認できました。そして、縄文人の精神性について多くの新しいことを学びました。例えば、赤漆が塗

られた糸で作られた装飾品を亡くなった人に着用させたり、亡くなった幼児の手と足の跡が粘土板に刻まれたり、意図的に壊した「茅空」などの土偶を埋めたりする習慣があったということを知りました（北海道の唯一の国宝となった「茅空」をあえて壊すなんて、今では想像できませんが）。



縄文文化交流センターは、今回の旅で最も大きな総合施設で、近くの垣ノ島遺跡や大船遺跡だけでなく、縄文時代や縄文文化を全体的に知ることができました。

この旅を通して、縄文人とその生活様式を深く理解することができたと思います。縄文時代は、その名の由来となった「縄文土器」で知られていますが、その装飾豊かな土器は、何千年にも渡る縄文時代や文化のほんの一部なのだと実感しました。土器に模様を残したように、縄文文化は私の心にも跡を残したのでしょう。縄文文化は土器だけではないのですが、不思議なことに、縄文遺跡群を思い出ただけで、胸が高鳴ります。



# 北海道 JET スポットライト



北海道にはアメリカ、カナダ、シンガポール、中国、韓国、イギリス、オーストラリアなどから約 300 人の JET プログラム参加者（外国語指導助手、国際交流員、スポーツ国際交流員）がいます。赤れんが通信では、こうした様々な国々からやって来た皆さんのストーリーを伝えていきます。



## MEET MICHAEL ARTHUR

今回は、かわいい帽子を好む自然愛好家、マイケル・アーサーさんを紹介します。マイケルさんは道東の弟子屈町在住の ALT です。JET 参加者になって 4 年目です。

### 簡単な自己紹介を聞かせてもらえますか。

こんにちは、私はマイケル・アーサーと申します。あまり嬉しくありませんが、生徒によく「マイケル・ジャクソン」と呼ばれています。ただ「マイケル」と呼ばれることが多いです。カリフォルニア州の州都であるサクラメント市の出身です。2018年に来道しました。



### 北海道（日本）来るきっかけは何でしょうか。

よく聞かれる質問ですが、今まで答えが完全に当たったことはないような気がします。そうですね、なぜここに来たのでしょうか。

幼少期の思い出で鮮明に覚えていることの中に、父と一緒に黒澤明監督の日本の古典的な映画を見たことがあげられます。数年経ち、大学入学後は、小津安二郎の作品に夢中になりました。おそらく、日本の映画の魅力に惹かれたことをきっかけに、何年もの間に感心が深まり、明確な目的があった訳ではありませんが、最終的に日本へ行くことに繋がったと思います。まあ、ドラクエが好きなことはありましたが。

### これまでの経験はいかがでしたか。

最高です。弟子屈町には日本の最も素晴らしい自然風景と呼べる場所が何か所も集まっていて、この町に派遣されたことをとても幸せに感じます。家から摩周湖までは車で15分ほどで行け、気の向くままに屈斜路湖の湖畔を自転車で走れます。静かな山や森などの素敵な自然もいっぱいあるし、なんて素晴らしい町でしょう！

### これまで一番印象に残っていることは何でしょうか。

印象に残っていることは沢山ありますが、その中でも驚くほど印象的な出来事と言え、間違いなく熊と偶然出くわしたことです。友達と一緒に、美留和の森をマウンテンバイクで走っていた時、乗りながら、サイレンを鳴らしたり、30秒おきに大声で叫んだりして、ずっと熊に気を付けてい

ました。しかし、最後の下り坂に着いた時、私は勝手に飛び出してしまいました。サイレンも鳴らさず、猛スピードで走っていきました。だって、ゴールが近いでしょう？すぐ目の前に森と草原を隔てるゲートが見えてきて、ここで熊に遭うわけではないだろうと思った時、二足で立っている雌熊と2匹の子熊が遊んでいる様子が視界に入り、その瞬間魂が抜けるような気がしました。

この経験で学ぶべきことは何でしょう？それは、美しい森の中を駆け抜けるのは、最高に気持ちがいいかもしれませんが、惜しげもなく喜びを与えてくれる大自然こそが、その喜びをいとも簡単に奪うということです。



住んでいる地域の好きなところは何ですか。

「緑」ということです。真面目な話ですよ。7月から9月にかけて、弟子屈町は驚くほど鮮やかな緑に包まれます。さあ、白樺に囲まれた釧路川のほとりにいるところを想像してみてください。森にはシダが絨毯のように広がっています。少し先には、自分の身長より高い場所に咲く花々が日の光を浴びながら、そっと揺れています。川沿いを散歩しながら、セミの鳴き声と川の音の調和に耳を澄ますと、まるで「緑」そのものが歌ってくれていると感じるでしょう。一つは全て、全ては一つ。

